

待降節第一主日

2010.11.28

マタイ 24・37-44

典礼暦のカレンダーがまた一枚めくられて、2011年度の典礼暦の新たなサイクルが始まりました。年毎に巡り来るこのような主日のミサを中心とした典礼暦のサイクルは、一般の暦がそうであるように、一年の季節の巡りをしるし付けるためだけにあるものではありません。一年毎の時の流れの中で、子供たちが着実に成長してゆくように、クリスマスの夜、今年もまた新たな思いをもってお迎えするイエス・キリストが、私たちのうちに成長してゆかれることを願って、典礼暦の新たなページが繰られてゆくのです。お生まれになったイエスが聖母と聖ヨセフの見守りの中で成長されてゆかれたよう、そしてそのことがお二人にとってこれ以上にはない喜びであったように、クリスマスの夜、今年も新たな思いでお迎えするイエスとの絆を大切にしたいと思えます。年毎にめくられてゆく典礼暦のカレンダーに従って、私たちのうちのイエスとの絆がますます深められてゆくことを願って、典礼暦の新たな年の初めである、待降節第一主日の今日のミサをおささげして祈りたいと思えます。

年毎に、新たな思いで私たちのうちにお迎えするイエスとの絆を深めて行くためには、イエスを見守る聖母と聖ヨセフのように目覚めていなければなりません。今日待降節第一主日の福音のみことばが、私たちに警告していることも目覚めているようにということです。

カレンダーの日付とともに流れ行く日々の暮らしの中であって、年ごとに新たなカレンダーに差し替えるのは、目の前のことに忙殺されて、自分を見失い、自分の人生に対して眠り込んでしまわないためです。典礼暦の新たな年が待降節をもって始まり、その第一主日のミサの中で、「目覚めていなさい」というみことばが響くのもそのためです。

今日の福音に語られているノアの洪水の前に生きていた人々や、他の全ての人々と同じようにそれぞれの人生を生きている私たちは、洗礼を受けてカトリック信者となることによって、私たちの人生の中にイエス・キリストをお迎えしたのです。そのことによって、私たちの人生は、カレンダーに従って年毎に繰り返される日々の務めの連続だけではなく、またカレンダーにしるし付けた目標の達成だけに向けられているだけのものでもなくなったのです。

私たちが信じているイエス・キリストは、私たちを力づけ、私たちとともに歩むために、私たち一人ひとりの人生の同伴者として、私たちのもとに来てくださったのです。日々の暮らしの中で、そのイエスに心を向けて生きることが、カトリック信者として、目覚めて生きるということです。

カトリック信者として生きる私たちの人生にともにいてくださるイエスに心を向けるために、私たちはクリスマスを必要とします。クリスマスには私たちのこの世界にお生まれくださった、神の子イエス・キリストの誕生を祝います。そのようにして、私たちの世界に来てくださった神の子イエス・キリストは、その世界の中に生きる、洗礼によってカトリック信者となった私たち一人ひとりの人生をも訪れ、私たちの人生の行く手を示し、導いてくださるのです。

今日の福音のみことばが私たちに告げていることは、この世の務めと営みの全てを終えるとき、私たちはイエスが指し示し、導いてくださる私たちの人生の真の目的地に到達するのだということです。そこには、この世の全てのことの最終的審判者としての「人の子」イエス・キリストが私たちを待っていてくださるのです。今日の福音はこの世界の終末を語りながら、その最終局面における私たちとイエス・キリストとのそのような決定的出会い、対面が用意されていること告げています。その時初めて、私たちが生きるこの世の人生の真の意味が、私たちとともに歩み、私たちの全てを知っていてくださる、全て者の審判者イエス・キリストによって明らかにされるのです。そのような最後の審判の光に包まれることによって、今私たちが苦しめている人生の無意味さ、不可解さの全ては解消されるのです。私たちの人生の旅路がその最終目的地にたどり着かなければ、そこを目指すものでなければ、私たちの人生は、私たちの人生が終末を迎えるとき、不可解さと無意味さの闇の中に消えてしまうことでしょうか。カレンダーの日付とともに過ぎ行く私たちの人生において、目覚めていなければならないのはそのためです。私たちのカトリック信者としての信仰は、私たちにそのような目覚めを促し、目覚めて生きることの大切さを教えるのです。

今日の福音のみことばは、全ての者の終末を語りながら、それが何時訪れるのか、私たちが一番知りたいことについては、答を拒否しているように思えます。けれども、果たしてそうでしょうか。泥棒に入られることのないように、目覚めていつも警戒していなさいということは、私たちがまだ先のことだと思っている終末は目の前にあるということです。そのことを意識し、常にそれに備えて生きるということが目覚めているということです。

この一年の間にも、私たちにとって大切な方々が、神に召されて私たちのもと

から旅立って行かれました。「どうしてあの人が」と私たちはいまだに深い悲嘆の中にありますが、その悲嘆の中で、今日の福音の畑で働く二人の男と、臼を引いている二人の女の話が現実のことを語っていることに気づかされます。

確かに、そのような現実は、後に残された私たちを深い悲嘆に突き落とします。けれども、私たちが信じている死者のうちから復活されたイエス・キリストは、私たちをそのような深い悲嘆の中から立ち上がらせてくださる力を持っておられます。私たちのもとから旅立って行った方々は、復活の主イエス・キリストの御手に助け起こされて、その主のみ前に立ち、喜びのうちにその人が歩んだ人生の真の意味を告げられているのです。

私たち全ての者は、何時人の子であるイエス・キリストが決定的に私たちのもとを訪れても、その御前に喜んで立つことができるようこの日々を生きるが求められています。そのためには、私たちが、私たちの人生にお迎えしたはずのイエス・キリストに心に向け、私たちとともに歩んでくださるイエス・キリストの導きに信頼して、この日々を生きてゆく決意をあらたにすることが求められます。待降節、そして迎えるクリスマスは、カレンダーの日付とともに過ぎ行く私たちの人生への、教会の典礼を通しての、私たちの目覚めを促す神からの呼びかけです。そのような呼びかけに促されて、真に自分の人生に目覚めた信仰者として、この待降節の日々を生きてゆきたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高